

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006－2008

課題番号：18520205

研究課題名（和文） 19世紀フランス小説における女性とセクシュアリティと子供像

研究課題名（英文） La sexualité féminine et les images d' enfants dans les romans français du XIXe siècle

研究代表者

高岡 尚子（TAKAOKA NAOKO）

奈良女子大学・文学部・准教授

研究者番号：30403314

研究成果の概要：

19世紀フランス小説に描かれた「子供像」を収集・分類し、その扱われ方を女性（母）のセクシュアリティの観点から考察した結果、特に男性作家によって描かれた母親像には明らかな類型が存在し、子供との関係にはそれぞれの女性が置かれた立場とセクシュアリティが大きく影響していることが明らかとなった。また、ジョルジュ・サンドなどの女性作家が描いた女性（母親）像・子供像には、男性作家のそれとは異なる特徴が認められた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	360,000	2,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：仏文学・文学一般・19世紀小説・女性論・ジェンダー論

## 1. 研究開始当初の背景

19世紀フランス小説を分析、考察するにあたり、女性とその諸問題（恋愛、結婚、セクシュアリティ、生殖、出産など）に注目する研究者は多く、本研究開始当時も、そのような観点からのアプローチは重要視されていた。特に、本研究代表者が主に研究対象としてき

たジョルジュ・サンドの研究に関しては、作家が女性ということもあり、特に作品中の「女性」についての言及や分析が多くなされてきたという事情がある。このような研究環境において、本研究が提示した独自性は、女性よりさらに周縁に追いやられ、ほとんど考慮されることのなかった、小説作品中の「子

供」に注目した点である。このような「子供」のあり方を、19世紀文学界にあって「他者」であった女性作家がどう描いたかにまず注目し、それを確実な「主体」であり得た男性作家のそれと比較することで、さらに重層的な視点が得られると考えた。また、「子供」を媒介に、母となる女性のセクシュアリティに言及し、それを基盤に「母親像」・「子供像」を類型化した研究はまだ存在しなかったため、結果が得られれば、ジェンダー視点による文学研究の一端として成果をあげるものと期待された。

## 2. 研究の目的

19世紀フランス小説において、女性と結婚というテーマは特筆すべき位置を占めていたと考えられる。本研究においては、女性の人生を時間軸に沿って分析するのではなく、逆の方向からのアプローチを試みた。つまり、小説に描かれる文学表象としては、従来あまり注目されていない「子供像」の分析からはじめ、時間を遡る形で女性のセクシュアリティと生殖の問題に進み、そこから得られた結果をもとに恋愛や結婚の問題を考えるという道筋である。最終的には文学が描いた社会を「子供像」から俯瞰することを目的としたが、その際、子供を中核に据えた作品を多く書き、自身が女性としての人生を生きる作家、ジョルジュ・サンドの作品を多く取り扱った。また、当時の衛生学者や医学者、社会学者の調査・研究が文学者に与えた影響や、最新のジェンダー理論から得られる論点についても考察の対象とした。

## 3. 研究の方法

(1) 19世紀フランス小説に描かれる「子供像」

の収集と分析・・・小説作品に描かれる子供たちを可能な限りピックアップし、どのケースを素材として扱うかを決定する。

(2) 母となる女性の描かれ方の分析・・・研究過程において、この部分に最も多くの時間を費やした。収集された「子供」に関わる「母」を類型化し、まとめた。その際、同じカテゴリーに分類される女性（母）でも、男性作家によって描かれる場合と、女性作家によって描かれる場合とで特徴的な差が現われるかどうか注目した。

(3) 19世紀フランスにおける女性の位置付けの検討（医学的・社会的・経済的・ジェンダー論的見地から）・・・19世紀から現代に至るまで、女性とそのあり方に関してはさまざまな研究がなされ、論考が発表されてきた。そのような研究をもとに、「母としての女性」のセクシュアリティがどのように認識されているかを検討した。

(4) 小説に描かれた「子供像」が映すものを検討・・・(1)・(2)・(3)によって得られた結果から、「子供像」が特に「女・母」の何を映し出していると考えられるか、また、小説における子供の配置から、人間や社会のあり方に関する認識の何が明らかになるかを検討した。

## 4. 研究成果

(1) 分析対象としては、まず、本研究代表者が長年研究に取り組んできた19世紀フランスの女性作家ジョルジュ・サンドの作品に注目した。というのも、そもそも「子供像」に注目しようと考えたきっかけが、サンドの作品に多くの子供が登場し、その存在が、作家が常に追求し続けた「社会における女性のあり方」の問題と深くかかわっている印象を持つ

ていたためである。また、サンド作品の特徴に注目することで、女性作家が描く女性と子供像と、同時代の男性作家のそれとの比較という視点の導入が可能になった。

(2)19世紀フランス小説における「子供像」の収集を進めた結果、予想通り、子供たちそのものには独自の個性や人生が与えられることはめずらしく、親との関係によって登場させられ、語りの題材とされていくことが明らかになった。従って研究は、「母親」側の類型化と、そこに現れるセクシュアリティの問題に重点を置いて進められることとなった。

①19世紀フランス小説における子供像を大別。

②母親の側から、①の子供像を分類。

③「女性とセクシュアリティ」の観点から、「女性と子供」にまつわる事柄、つまり、生殖活動としての性行為が当時の女性にとってどのような問題をはらんでいたかという問題や、女性による「産むこと」・「産まないこと」の選択、「母になること／であること」の意味、また、母であることに対する社会的要請はどのようなものであったか、などについて検証。

④単独で存在感を発揮するように描かれた「活躍する子供像」を、サンドやユゴーの作品を中心に分析。

(3)(2)の分析結果を、研究成果報告書にまとめた。目次と概要は以下のとおり。

第1部 子供たちの肖像・母親たちの肖像

第1章 「子供たち」の側から

—19世紀フランス小説に描かれた子供像—

(「子供像」を大きく「名もなき子供たち」と「活躍する子供たち」に分類した。)

第2章 「母親たち」の側から

—19世紀フランス小説に描かれた母と女のセクシュアリティ—

(母親像の類型を整理した。)

第2部 「娘・妻・母」のセクシュアリティ

第1章 「家族」の中の「娘・妻・母」

(女性が娘・妻・母へと社会的ステージを変えることにどのような意味づけがされており、「産む性」であることの認識がどのように描かれているかを『新エロイーズ』(ルソー)・『ジャック』(サンド)・『二人の若妻の手記』(バルザック)を用いて分析した。)

第2章 「産まない妻」たちとその身体

(結婚した後、産むことを拒否するように描かれる女性たちについて、『アンディヤナ』・『ヴァランティエヌ』(サンド)・『ウジェニー・グランデ』(バルザック)を題材に分析した。)

第3章 「婚外の子」の可能性—「母と娘」の物語として—

(結婚の外に子供を持つ、あるいは持つ可能性のある女性たちの自己認識の描かれ方を通して、既婚女性のセクシュアリティがどのように表現されているかを検討した。『ジャック』(サンド)・『三十女』(バルザック)・『赤と黒』(スタンダール)・『感情教育』(フロベール)・『シモン』(サンド)他を分析対象としている。)

第4章 働く女たちのセクシュアリティ

—『アンドレ』・『オラース』・『レ・ミゼラブル』における母と子供たち—

第3部 「子供たち」の可能性

第1章 「棄てられた子」・「拾われた子」

(『棄て子フランソワ』(サンド)に描かれた子供像を中心に、遺棄された子供たちがどのように捉えられ、描かれていく可能性があったかを検討した。)

第2章 次の時代の子供たち：「都市の子」・「田園の子」

『レ・ミゼラブル』(ユゴー)・『ジャンヌ』・『魔の沼』・『棄て子フランソワ』・『愛の妖精』・『笛師のむれ』(サンド)を題材に、活躍する子供たちについて検討した。

(4)本研究では、子供との関係を切り口に女性(母)人物を分類するという、これまでにない手法を導入することにより、新たな分析方法を提示することができた。だが、時間の制約もあり、扱う作品の多くは19世紀半ばまでのものとなった。世紀後半の小説作品に現れる子供像と女性の関係については、今後の課題としたいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ①高岡尚子, 「ジョルジュ・サンド『アンドレ』・『オラース』に描かれる19世紀フランス女性労働者たちの空間」, 『女性学研究』(大阪府立大学女性学研究センター論集), 16, 1-26, 2009, 査読無
- ②高岡尚子, 「母-娘関係が語ること—ジョルジュ・サンドの小説作品を通して—」, *Gallia* (大阪大学フランス語フランス文学会発行), 48, 31-40, 2009, 査読有
- ③高岡尚子, 「ジョルジュ・サンドの作品世界にみる母と女のセクシュアリティ」, 『奈良女子大学文学部研究教育年報』, 5, 71-82, 2008, 査読無
- ④高岡尚子, 「女性の社会と身体—ジョルジュ・サンドの初期作品における〈産む女〉・〈産まない女〉」, 柏木隆雄教授退職記念論文集『テキストの生理学』, 1, 231-243, 2008,

査読無

⑤高岡尚子, 「ジョルジュ・サンド『アンドレ』を読む—フェミニズム批評・ジェンダー批評から—」, 『奈良女子大学文学部研究教育年報』, 4, 23-33, 2007, 査読無

⑥高岡尚子, 「どの子供たちが生き残ったか?—ルソー『新エロイズ』からジョルジュ・サンド『ジャック』へ—」, 『外国文学研究』, 25, 85-110, 2006, 査読無

[学会発表] (計 1 件)

①高岡尚子, 「『新エロイズ』、『ジャック』、『二人の若妻の手記』における母-女-子供たちの配置から見えるもの—」, 日本ジョルジュ・サンド学会, 2007年5月19日, 明治大学

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

高岡 尚子 (TAKAOKA NAOKO)  
奈良女子大学・文学部・准教授  
研究者番号: 30403314

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし